

## 「常盤の緑」編集余話

櫻田喜貢穂（7組）



東京青木会というのは、青木村出身の関東在住者の「故郷の会」だが、そのスタートは五島慶太氏が大正7年に始めた「禁酒会」だということから、100年も続いていることになる。「禁酒会」とは上手いネーミングである。

同郷の畏友宮原豊君（9組）の父上平八郎氏は、郷土史研究で知られた文人であるが、東京で逓信省に勤務していた戦前、「禁酒会」に参加されていた。ちなみに、父上は若いころから相当にいける口であったそう。

宮原君と私は、いま東京青木会の役員を務めているが、村の先輩に捕捉されるきっかけは、2012年7月の上田高校関東同窓会の第51回総会である。宮原君は実行委員長として講演会の講師に招いたネパール在住の宮原巍氏（50期）を紹介する際、同氏も自分も青木村の出身であると述べた。それを聞いていた私も、総会議長として議事を始める際、「私も青木村です」と口を滑らせてしまった。

まもなく、村の先輩から勧誘のメールが届いた。会員の高齢化が進んでいるおり、若手（？）の参加を強く要請するというものだった。還暦をとっくに過ぎていのに「若手」として期待されることに戸惑いを感じたので、宮原君に様子を見てもらうことにした。参加を表明した宮原君は直ちに理事に選任され、翌年には私も呼びこまれ、2016年には揃って副会長に就任、そのまま東京青木会創立100周年を迎えることになったのである。

会長は100周年記念事業をやろうと提案してきた。問題は何をやるかだ。故郷青木村には、大正デモクラシーのころから「青木時報」という地域新聞があり、それが青木村の「義民・自立・反骨」の精神を育んできたと言われている。竹下内閣の時の「ふるさと創生資金」の1億円を「青木村誌」の制作費にあてるという品性の村である。そんな村で育ち、関東で人生を送ってきた先輩、後輩たちは、故郷青木村にどのような思いを抱いているのだろうか。青木村とどどのようにかかわって生きてきたのだろうか。筆を取ってくれるのであれば、それぞれの人生の一端が記されることだろう。それをぜひ読ませてもらいたいものだと思った。そこで私は、会員から寄稿文（随筆）を募り、それを中心とする記念誌制作を提案した。反対は無く、記念誌事業が決まったのは2018年の夏である。

直ちに編集委員会が組織され、会長が編集長になり、記念誌発行事業がスタートした。宮原君と私も編集委員になって企画会議に参加し、会員の皆さんに寄稿してもらう段取りを組み立てた。記念誌のタイトルは「常盤の緑」に決まった。村歌（かつては校歌）が「常盤のみどり」だからである。手分けして寄稿文を集め、入力し、校正・校閲を行った。

宮原君は記念誌の目玉である「東京青木会100年の歩み」の執筆を進め、原稿に添える写真の手配も怠らなかつた。私は、「100年の歩み」の担当責任者として、原稿に目を通し、宮原君と二人で納得できる最終稿を完成させた。そして、4月22日までにそれらの成果のすべてを編集長のパソコンに送信した。

刷り上がった記念誌は、6月9日の東京青木会総会の会場に直送され、60名以上の参加者に配布された。ところが、開けてびっくり、それは驚愕すべき代物だったのである。

寄稿文は校正・校閲の結果が消され、校正・校閲未了のまま印刷されてしまっていた。「100年の歩み」は、最終稿の半分ほどが初稿と差し替えられてしまい、写真もすべて欠落していた。要するに、最後の段階で編集長の独断で校了となり、編集委員の誰一人として最終稿のチェックに関与できなかったのである。こうした実態が明らかになったとき、怒りと悔しさで震えが止まらなかった。宮原君は、「本来であれば100周年の晴れ舞台を飾るはずの記念誌が、100年の恥知らずになりかねないものになってしまった」と嘆いた。

当然のことながら寄稿した会員から静かではあるが極めて強い非難の声が上がった。私どもは、この声を支えに編集委員会の招集を迫った。ようやく開かれた編集委員会は6月9日に発行された記念誌を「言葉」も「想い」も蔑ろにしたものであるとして、これを廃棄し、「改定版」を制作すべきであるとの決議をし、役員会に具申した。

それを受けて8月11日に開催された役員会において、6月9日発行の記念誌の廃棄と「改定版」の制作が決議され、私を編集長とする新たな編集委員会が組織された。

新しい編集委員会は、寄稿された原稿を大切にしたいとの思いから総力を挙げて校正・校閲を行い、後世に恥じることのない記念誌を目指した。「100年の歩み」についても写真付きの本来の原稿と差し替えるなどして、読みやすいものに作り変えた。宮原君と私、それに67期の山本修士君を中心に、短期集中して作業を行い、9月下旬には改定版が完成し、ついに100周年記念誌「常盤の緑」が刊行されたわけである。

ここからは付け足しになるが、「常盤の緑」の発行がなったら、私と宮原君は東京青木会の副会長を辞するつもりでいた。ところが、会長辞任という事態が発生したため、11月30日の役員会で二人して辞意撤回を促され、かつ、どちらかが会長に就任するよう要請された。要するに、二人に東京青木会の運営を任せるとのお達しが出されたわけである。

そこで、宮原君と目と目で会話を交わし、一つ年上の私が会長に就任し、宮原副会長とのコンビで東京青木会を運営していくことにした。これが東京青木会の最新情報である。

なお「常盤の緑」であるが、関心がある方は声をかけてください。在庫をお分けすることができます。(2019年12月19日記)

【東京青木会 100周年記念誌「常盤の緑」】

